

会誌編集委員会

女子部

Number
6

デパ地下と NIH

芝浦工業大学 野田 夏子

いや、デパ地下のお惣菜が健康に良いとか悪いとか、NIH (National Institute of Health, アメリカ国立衛生研究所) のデータを基に議論しよう、というのではない。健康に良からうが悪からうが、デパ地下は便利です！(ついでながら、最近では健康に配慮したものも増えている印象がある。)

久しぶりに会った友人との会話が盛り上がり夕食の準備が間に合わないかなというとき、家でちゃんと食べたいのに疲れ切って作るのもしんどいなというとき、デパ地下をのぞいて帰ろうか、となる。いろいろなおかずをきれいに詰め合わせたお弁当は、お惣菜を少しずつ買うより値段的にお得なのだが、ある友人は必ずお弁当よりお惣菜を何種類か買うという。お弁当は買ってきた容器のまま出すしかないが、お惣菜なら家の食器によそい直して出せる、つまり買ってきました感が薄れるのだという。デパ地下のお惣菜は、下手に自分で作るより美味しかったりする。家庭では手に入れにくいが必要な食材やスパイスがちゃんと使われているし、自分で作ったら手抜きしたいところも手抜きせずに決められた工程を踏んで作られているのだから。それでもデパ地下惣菜は、家庭の食卓にあって、NIH, Not invented here な存在なのだ。

ソフトウェアの再利用を阻む要因の1つが NIH 症候群だとはよく言われるところである。人は他人が作ったもの

を信用しない。自分で同じものを作りたがる。細部の詳細が分からない、どんなバグが潜んでいるかも分からない、ここの実装方法が気に食わない、このやり方では効率が悪い等々、さまざまなもっともらしい理由を並べては、既存部品を使わず、自分で同じものを作ろうとする。こうした態度が再利用を阻みソフトウェア開発に悪影響を与えることを頭では理解されていても、いざご自身がコードを書く段になるとご自分でお書きになりたがる方も目にしたりする。授業で NIH 症候群の話をしたら、「変なの。そんなのおかしいよ」と学生はバッサリ切って捨てた。これからの若者がソフトウェア開発を変えていってくれるだろうか。もっともプログラミングの授業で散々苦しめられている彼らは、同じものがあるならコピペしたい、自分で書くのはいやだというだけかもしれない。就職して数年もすれば、立派な NIH 症候群になるのだろうか。そうならないように心して教育しなければ。

さて、今日の夕食のポテトサラダは美味しかったなあ、と満足しつつ、あの機能はやっぱり自分で書こう、あれが使えるとかいう話を聞いたけどどうも信用ならんし、とか思っているそこのあなた、さっきのポテトサラダはデパ地下謹製かもしれませんよ。

Newsstand で購読ができるようになりました！

会誌「情報処理」と「デジタルプラクティス」が Apple Newsstand で購読ができるようになりました！
Newsstand は iPad, iPhone, iPod Touch などの iOS にプリインストールされている本棚です。

会誌

- 月単位の購入が可能です。
- 購入前に立ち読みができますので、ぜひいちどおためしください。
- 年間購読で 12,400 円 (1 冊あたり約 1,000 円) でお得です。
1 カ月：1,700 円 / 6 カ月：9,400 円 / 1 年：12,400 円

DP

- 「デジタルプラクティス」は会員・非会員を問わず、どなたでも **無料** でお読みいただけます。
- DP アプリを一度ダウンロードすれば、最新号が自動で送られてきます。

学会誌
日本初！



アプリのダウンロードはこちら (無料)

会誌「情報処理」



<https://itunes.apple.com/us/app/yue-kan-qing-bao-chu-li-qing/id910830137?l=ja&ls=1&mt=8>

デジタルプラクティス



<https://itunes.apple.com/jp/app/qing-bao-chu-li-xue-huidejitarupurakutisu/id923233022?mt=8>

この記事が皆さまのお手元に届くのは、もうすぐ12月という季節。一方、この原稿を書いている現在は、やっと秋の気配が感じられるようになってきた10月です。私の勤務先はキリスト教主義の大学なので、12月にはきっと、クリスマスツリーの点灯式があったり、メサイアの演奏会があったりと、クリスマス気分が盛り上がっているに違いない！と想像しながらこの文章を書いています（この4月に異動したばかりなので、本当に想像しているだけです。すみません...）。

さて、クリスマス気分とはあまり関係ないかもしれませんが、勤務先のチャペルにはパイプオルガンが設置されており、これがとてもすばらしいので、今回は楽器を演奏するという事、そして音楽を鑑賞するという事と情報技術の関係について、少し考えてみたいと思います。なお、私自身は音楽情報科学の研究者ではないので、あくまで演奏者視点であること、ご了承ください。

楽器の演奏は、即興という場合ももちろんありますが、通常は楽譜というある種のプログラムが存在し、それを人間が解釈することで行われます。当然自動化が容易な処理で、自動演奏機械が古くから存在しています。人間らしく自動演奏する技術の研究というものもあるようで、将棋のプロに勝つコンピュータの出現と同様、そのうちコンテストに優勝するレベルのコンピュータ奏者が現れるのかもしれませんが。一方、楽器の演奏は身体性を持つものであり、そう簡単には人間並みにはならないだろうなという思いもあります。私自身も、素人ながらオルガンを演奏します（さすがにパイプオルガンは無理なので、足踏みのリードオルガンですが）。ほかの楽器と比べても、リードオルガンは非常に身体的な楽器です。リードが吸

い込む空気の量で音量を変化させますが、これを足踏みペダルを踏み込む強さと速さや、スウェルと呼ばれるレバーの開き具合で調整します。この反応には若干の（というか相当の）遅れが生じるので、数小節前からこれを意識して調整する必要があります（大きな音を出すためには空気を溜め込む必要があるのですのための時間がかかる、逆に音を小さくしたいときはある程度空気を放出させる必要がありやはり時間がかかるのです）。このずれを身体全体に覚えこませ、自分の出したい音が出せるよう練習します。

一方、音楽を鑑賞するための技術もどんどん進化しています。いつでもどこでも手軽に音楽を楽しめる環境が手に入るのはとても素晴らしいことですが、やはりライブに勝るものはありません。パイプオルガンの場合は、建造物の構造自体がオルガン用に設計されており、建物全体がある種の楽器の役割を果たします。耳で音を聴くというより、建物全体から身体に向かってくる空気感を感じることであり、必然的に身体性、ライブ感を意識します。

身体性を持った自動演奏が可能になるのか？ライブ感を忠実に再現できる超臨場感システムは構築できるのか？興味深くあると同時に、ここはやはり人間には敵わない領域であってほしい！と、日々オルガンを弾きながら考えています。

さて、現実の季節に戻ると、研究室の学生たちは最近、ハロウィンパーティの相談で盛り上がっています。女子大特有なのかもしれませんが、衣装を手作りしたり、結構本格的に仮装するようです。ハロウィンっていつからこんなにメジャーなイベントになったのでしょうか？

